

総持院跡（法雲院境内）
常盤仲之町遺跡発掘調査報告書

2025年
特定非営利活動法人平安京調査会



1. 遠景（北から広隆寺をみる）



2. 調査全景（東から）



1. 土坑14-1 (オルソ画像)



2. 土坑14-1 (軒瓦出土状況)

例 言

- 1 本書は、京都市右京区太秦蜂岡町 13 番地、他で実施した、総持院跡(法雲院境内)・常盤仲之町遺跡発掘調査成果報告書である。(京都市番号 24S315)
- 2 調査は、有料老人介護施設開発に伴い実施した。
- 3 現地調査は、平安埋蔵文化財事務所株式会社より特定非営利活動法人平安京調査会に委託され、辻 純一が担当した。
- 4 調査期間は令和 7 年 2 月 17 日～令和 7 年 3 月 26 日である。
- 5 調査面積は 300m²である。
- 6 本文、図中で使用した調査位置図は京都市発行の都市計画基本図(縮尺 1: 2,500)「鳴滝」を調整して使用した。
- 7 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高は T.P.(東京湾平均海面高度)である。
- 8 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 9 本書の執筆・編集は辻 純一が行った。
- 10 現地での記録写真撮影は辻 純一と九鬼みずほが行い、出土遺物の実測は平尾政幸、撮影は九鬼みずほが行った。
- 11 調査にかかる資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 12 発掘調査および整理作業の参加者は以下のとおりである。

〔発掘調査〕辻 純一・吉崎 伸(平安京調査会)

作業員 大野 誠・川名貴樹・岸波敏明・九鬼みずほ・小西 敏・多田光利・
友重文彰・土肥正照

〔測量作業〕株式会社コンピュータ・システム

〔整理作業〕平尾政幸、株式会社コンピュータ・システム
- 13 出土遺物の年代観は、平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第 12 号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019 年による。
- 14 本調査の検証審査員は鈴木久男 京都産業大学客員教授である。検証だけでなく調査に対する御教示、御協力をいただいた。

目 次

第Ⅰ章	調査の経緯	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査経過	1
第Ⅱ章	位置と環境	4
1.	位置と環境	4
2.	既往調査	4
第Ⅲ章	遺構	9
1.	基本層序	9
2.	遺構	9
3.	平安時代後期(5段階)の遺構	13
4.	鎌倉時代初期(6段階)の遺構	13
5.	鎌倉時代中期～後期(7段階)の遺構	16
第Ⅳ章	遺物	19
1.	遺物概要	19
2.	土器類・瓦類・銭貨・土製品・石製品	19
第Ⅴ章	まとめ	26

図 版 目 次

巻頭図版 1	遺構	1. 遠景(北から広隆寺をみる)
		2. 調査全景(東から)
巻頭図版 2	遺構	1. 土坑 14－1(オルソ画像)
		2. 土坑 14－1(軒瓦出土状況)
図版 1	遺構	1. 全景垂直 2
図版 2	遺構	1. 江戸時代遺構全景(東から)
		2. 全景(東から)

図版 3	遺構	1. 土坑 14－2 (東から)
		2. 土坑 14－2 (南から)
図版 4	遺構	1. 土坑 14－1 (東から)
		2. 土坑 14－1 (北から)
図版 5	遺構	1. 土坑 1 (東から)
		2. 土坑 4 (北から)
図版 6	遺構	1. 土坑 5 (東から)
		2. 土坑 73 (北から)
		3. 土坑 74 (北から)
図版 7	遺構	1. 土坑 73 (北から)
		2. 土坑 79・80 (東から)
図版 8	遺構	1. 土坑 85 (北から)
		2. 建物 (北から)
図版 9	遺構	1. 溝 60、土坑 1 (南から)
		2. 畑跡 (東から)
図版 10	遺物	(土器類・瓦類・土製品・銭貨)
図版 11	遺物	(土器類・瓦類・石製品)
図版 12	遺物	(土器類・石製品)

挿 図 目 次

図 1	調査区配置図(1:800)	2
図 2	調査経過写真	3
図 3	周辺調査位置図(1:5,000)	6
図 4	西壁・北壁断面図(1:50)	10
図 5	第1面平面図(1:150)	11
図 6	第2面平面図(1:150)	12
図 7	土坑 14－1・14－2 実測図(1:40)	13
図 8	土坑 79・80 実測図(1:50)	14

図 9	土坑 1・4・62・5・73・74・85実測図(1:50)	15
図 10	溝 56実測図(1:50)	16
図 11	建物実測図(1:50)	17
図 12	溝 60実測図(1:50)	18
図 13	出土遺物実測図(1:4)	22
図 14	出土遺物実測図(1:4)	23

表 目 次

表 1	周辺調査一覧表 1	7
表 1	周辺調査一覧表 2	8
表 2	遺構概要表	9
表 3	遺物概要表	20
表 4	遺物計測表 1	24
表 4	遺物計測表 2	25

第Ⅰ章 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

調査地は、京都市右京区太秦蜂岡町13他にあたり、周知の埋蔵文化財包蔵地である総持院跡(法雲院境内)及び常盤仲之町遺跡に該当する。ここに有料老人介護施設の建設が計画され、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下、「文化財保護課」という。)が対象地内で試掘調査を実施したところ、平安時代から鎌倉時代にかけての遺構が検出された。それら試掘調査成果を基に文化財保護課から発掘調査の指導があり、特定非営利活動法人平安京調査会(以下、「平安京調査会」という。)が発掘調査を実施することとなった。

2. 調査経過(図2)

調査地点は、広隆寺の北側約300mに位置し、周辺ではいくつかの発掘調査が実施されている。このうち、当地の東隣で行なわれた発掘調査(37)では遺構面が2面あり、近世と平安時代の溝、土坑等の遺構を検出している。

今調査でも試掘調査及び調査(37)の成果から、平安時代から鎌倉時代の遺構の検出を主たる調査目的とした。

発掘調査区は、保護課の指導により、遺構の残存状況が良好な建物建設部の南側に当たる東西25m、南北12mの300㎡を設定し調査を行った。

調査は令和7年2月17日に調査範囲の設定を行うと共に、調査機材などの搬入を行なった。夕方、文化財保護課の調査範囲確認を終えた。重機掘削は翌18日より開始し4日間をかけ、21日終了した。同時に株式会社コンピュータ・システムにより、調査区の西側に発掘調査基準点2点を設置した。重機掘削と同時に2月18日より人力により遺構面の遺構検出を進めた。26日に遺構検出を終え、午前中にドローンによるオルソ用の撮影を行い、そのオルソ図により略図を作成した。調査の進捗に従い、検出遺構の平面実測・セクション断面実測などを行った。写真撮影については、3月17日に調査区全景写真撮影を行い個別近景写真撮影も17・18日に行った。同時にドローンによる平面実測用の撮影も行い、その画像によりオルソ図及び平面実測図を作成した。また、調査の進捗過程においても必要に応じ写真撮影を行い記録した。調査完掘時には京都市文化財保護課の臨検を受け、検証審査員である京都産業大学日本文化研究所・鈴木 久男氏に現地にて調査説明を行うと共に指導を受けた。その後、西及び北壁を断割し、断面図の作成を行った。断面図完成後、重機による埋め戻しを行い、令和7年3月26日に埋戻しを完了し全ての調査を終了した。

また、調査期間中の3月1日には、原因者及び法雲院ご住職(七條 忠保氏)の許可を得た上で親子の発掘体験を午前、午後に分けて実施した。

体験をしながら、参加者には出土遺構や遺物の説明を行った。参加人数は午前 15 名、午後 15 名の計 30 名であった。



図1 調査区配置図(1:800)



1. 調査地全景



2. 重機掘削



3. 遺構掘削作業



4. 発掘体験



5. 調査風景



6. 文化財保護課の検査



7. 検証審査委員の検査



8. 埋戻し・調査終了状況

図2 調査経過写真

第Ⅱ章 位置と環境

1. 位置と環境

調査地は京都市の西部、桂川の左岸に位置し、北部一帯には山地が広がる。丘陵裾から南西を流れる桂川へ向けて、北東が高く、南西へ低くなる緩傾斜地となる。調査地の北東には国の名勝に指定されている雙ヶ岡（双ヶ岡）があり、その西の裾を北西の鳴滝・宇多野より南東方向へ御室川が流れる。

調査地が含まれる総持院跡（法雲院境内）及び常盤仲之町遺跡は、古御室川が形成した扇状地上に立地する。北部には山間部に旧石器や縄文時代の遺跡があり、古墳時代には大規模な群集墳が丘陵裾や丘陵腹、台地に築造される。調査地北東約 200m には常盤東ノ町古墳群や村ノ内遺跡が広がり、調査地南側約 300m には飛鳥時代に渡来系氏族である秦氏が造営したと伝えられる広隆寺がある。平安時代には広隆寺を中心にして集落が発展し、また、嵯峨方面に天皇の離宮や別業、寺院などが造営されると、平安京と嵯峨野地域を結ぶ古道であった嵯峨街道（現下立売通）が利用された。また、成立時期は不明であるが、城北街道が南北方向に延びる。調査地は北隣に嵯峨街道が、東側約 200m には城北街道が通っている。

2. 既往調査（図 2）

当地周辺では、広隆寺や映画村、JR 山陰線の高架化、城北街道の拡幅時の調査が多数行われている。調査地を含む常盤仲之町遺跡で実施された調査 5・8・9・10・22・27・28・29・30・32・33・34・37・38 であり今回の調査地に最も近くで実施されたものが 2023 年度に実施された調査 37 となる。以下、常盤仲之町遺跡内の調査について記述する。

調査 5 古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物・瓦溜、各時代の溝、中世から近世の土坑墓・井戸を検出した。古墳時代終末期には竪穴住居跡 24 棟、掘立柱建物 3 棟が見つかった。平安時代から鎌倉時代には掘立柱建物跡は 4 棟、石積を持つ溝 3 条、様々な形状をした土坑墓（羽釜を蔵骨器転用したものや石を投げ込んだもの）がある。鎌倉時代後期以降には土坑墓群を始め、室町時代の溝・瓦溜、江戸時代の井戸などがある。土坑墓群は北と南のグループに分かれ、北群が 35 基、南群が 25 基で、長方形・方形・円形などに分かれ各々の時期によって変遷する。

古墳時代から江戸時代にかけて連綿と続く遺跡であり、この調査では特に古墳時代の住居跡、平安時代後期から鎌倉時代後期にかけての土坑墓群が注目される。

調査 8 調査 5 の西側での調査である。小規模な踏査で室町時代の柱穴・土坑を検出した。

調査 9 広隆寺境内で初めて、霊宝館建設工事に伴う調査である。この調査では古墳時代終末期の竪穴住居跡 4 棟、鎌倉時代から室町時代の土坑と柱穴を多数検出した。竪穴住居跡は調査 5

で出土したものと同時期のものである。

調査 10 調査 5 の北東の調査である。古墳の周溝及び鎌倉時代の土坑を検出した。

調査 22 映画村内での調査である。ここでも古墳時代終末期の竪穴住居跡が出土した。他には平安時代から江戸時代の遺構を検出した。

調査 26 ～ 29、32 ～ 34 これらの調査は城北街道の拡幅に伴う調査である。常盤仲之町遺跡東端を南北に貫く形で 2008 年～ 2012 年にかけて調査が実施された。これらからは主に古墳時代の横穴式石室・溝、古墳時代終末期の竪穴住居跡、平安時代の建物・溝・土坑、鎌倉時代～室町時代の門跡・柵・溝・土坑などを検出した。

調査 30 広隆寺境内内の調査である。平安時代中期から後期の土坑・溝・柵・柱穴、鎌倉時代の柵・土坑・溝などを検出した。

調査 37 当調査地の西隣の調査である。平安時代の溝や土坑を検出した。

調査 38 2024 年度に実施された映画村内での調査である。2025 年 2 月まで発掘調査が実施され、現在はその成果を纏めている段階であり、報告書の刊行が待たれる。

これら調査と試掘調査の成果から、当調査地では古墳時代の古墳や周溝・竪穴住居跡、平安時代から室町時代の建物・溝・土坑墓、江戸時代の遺構の存在が想定された。

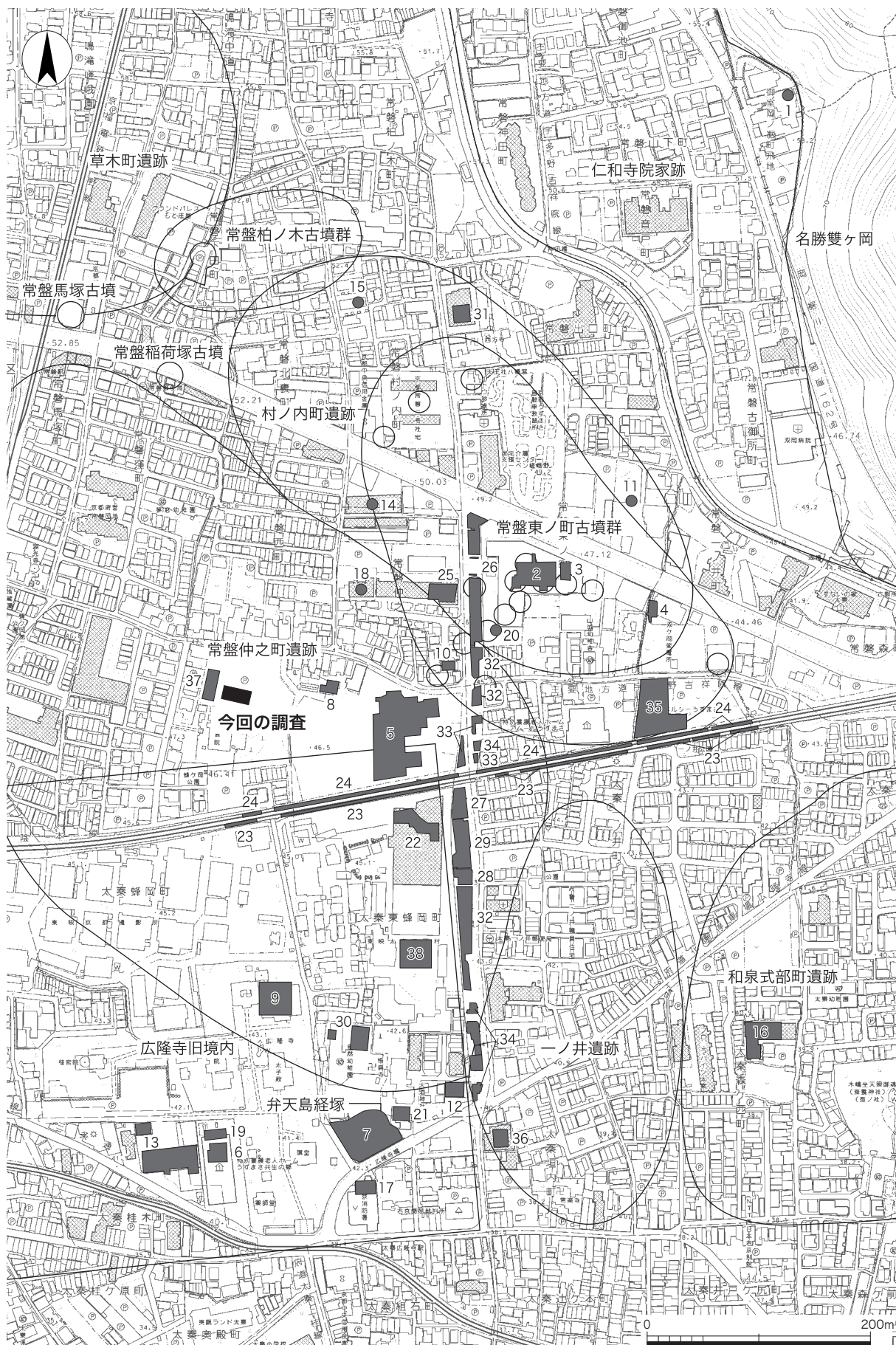


図3 周辺調査位置図(1:5,000)

表1 周辺調査一覧表1

No.	調査 年度	方法	調査日	調査概要	文献
1	1974	発掘	1974.11.01～ 1975.01.15	室町頃の土師器皿の出土する窯	「平安建設株式会社所有の双が岡西麓地に於ける埋蔵文化財発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報集』鳥羽離宮跡調査研究所 1976 年
2	1976	発掘	1976.10.26～ 1976.12.06	古墳後期の円墳3、室町～江戸の土坑墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告－I（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977 年
3	1976	発掘	1976.11.03～ 1976.11.15	古墳後期の円墳1、室町～江戸の土坑墓群、土師器・須恵器	「常盤東ノ町古墳群」『京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978-I』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978 年
4	1976	発掘	1976.11.24～ 1976.12.07	平安の柱穴群・土坑2、弥生～古墳の包含層、弥生土器・須恵器	「仁和寺子院跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集 1979-I』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978 年
5	1976	発掘	1977.02.01～ 1977.06.10	古墳後期の堅穴住居24・建物4・溝、平安の建物4ほか	『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅲ（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978 年
6	1977	発掘	1977.05.03～ 1977.06.12	飛鳥の基壇、奈良～平安の建物、瓦	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997 年
7	1977	発掘	1977.11.11～ 1978.02.11	弁天島経塚の調査。平安後期の経塚群、土師器・須恵器・白磁・軒瓦・金属製品・石製品	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997 年
8	1977	発掘	1978.01.30～ 1978.02.18	室町の柱穴・土坑	「日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所新築に伴う発掘調査」『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅲ（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978 年
9	1979	発掘	1980.02.01～ 1980.03.31	古墳後期の堅穴住居、平安・鎌倉・室町の土坑、土師器・須恵器・輸入陶磁器・陶器・磁器・植輪	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997 年
10	1979	発掘	1980.02.27～ 1980.03.15	古墳周溝、鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・瓦器・陶器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997 年
11	1980	立会	1980.05.22	弥生の包含層、弥生土器	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981 年
12	1980	発掘	1980.10.20～ 1980.11.24	古墳後期の堅穴住居、平安中期の建物・柵・柱穴	『広隆寺跡－右京検察庁庁舎改築に伴う発掘調査の概要－』昭和55年度（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981 年
13	1981	発掘	1981.07.13～ 1982.03.12	飛鳥の土坑、平安の梵鐘鑄造遺構	「広隆寺跡」『京都府遺跡調査概報』第5冊－2（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982 年
14	1982	試掘	1982.08.09～ 1982.08.10	古墳後期～室町の土坑・包含層、土師器・白磁	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983 年
15	1986	試掘 立会	1986.11.21～ 1987.04.03	弥生中期の土坑・流路・包含層、土師器・陶器・瓦	「調査一覧表太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987 年
16	1987	発掘	1987.05.06～ 1987.07.31	弥生中期の堅穴住居、古墳前期の堅穴住居・土師器、古墳中期の須恵器	「和泉式部町遺跡」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991 年
17	1990	発掘	1991.03.19～ 1991.04.20	飛鳥の溝・柱穴・土坑、平安～室町の包含層	「広隆寺旧境内1」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995 年
18	1991	立会	1991.12.03～ 1991.12.05	平安前期の長方形土坑、須恵器	「調査一覧表太秦地区」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992 年
19	1991	発掘	1992.01.12～ 1992.02.22	平安前期～中期の溝・土坑・柱穴、江戸の溝	「広隆寺旧境内2」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995 年
20	1992	発掘	1993.03.25	古墳の溝1、平安・鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・銭	「常盤東ノ町古墳群」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994 年
21	1993	発掘	1993.04.17～ 1993.05.31	飛鳥の堅穴住居・土坑、平安中期の溝・柱穴	「広隆寺旧境内」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年
22	1995	発掘	1996.01.11～ 1996.04.13	飛鳥の堅穴住居4、平安～江戸の遺構など	関西文化財調査会による発掘調査実績報告
23	2006	発掘	2006.01.20～ 2006.07.20	弥生の堅穴住居、古墳～飛鳥の堅穴住居、鎌倉の土坑墓・溝・柱列	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-6（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006 年

表1 周辺調査一覧表2

No.	調査 年度	方法	調査日	調査概要	文献
24	2008	発掘	2008.04.11 ～ 2008.06.27	弥生の竪穴住居、古墳後期～飛鳥 の竪穴住居・溝ほか	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財 研究所発掘調査報告 2008-3（財）京都市埋蔵文化財 研究所 2008 年
25	2008	発掘	2008.11.25 ～ 2009.01.14	古墳後期～飛鳥の竪穴住居ほか	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘 調査報告 2008-17（財）京都市埋蔵文化財研究所 2009 年
26	2008	発掘 (1 次)	2008.11.10 ～ 2009.01.14	古墳後期～飛鳥の竪穴住居、古墳 後期の横穴式石室ほか	『常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺 跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-20 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009 年
27	2008	発掘 (2 次)	2009.01.20 ～ 2009.03.19	奈良の掘立柱建物、鎌倉～室町の 土坑・溝・落込みほか	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調 査報告 2008-21（財）京都市埋蔵文化財研究所 2009 年
28	2009	発掘 (3 次)	2009.12.14 ～ 2010.03.12	飛鳥の竪穴住居、平安の区画施設・ 溝・土坑、鎌倉～室町の土坑など	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調 査報告 2009-16（財）京都市埋蔵文化財研究所 2010 年
29	2009	発掘 (4 次)	2009.12.14 ～ 2010.02.02	飛鳥の竪穴住居、鎌倉～室町の土 坑など	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調 査報告 2009-18（財）京都市埋蔵文化財研究所 2010 年
30	2010	発掘	2010.05.06 ～ 2010.06.22	平安中期～後期の土坑・溝・柱列、 中世の土坑・溝など	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財 研究所発掘調査報告 2010-4（財）京都市埋蔵文化財 研究所 2010 年
31	2010	発掘	2010.05.06 ～ 2010.06.10	縄文中期の土坑、古墳後期～飛鳥 の竪穴住居・土坑、中世の建物・ 柱列・土坑など	『村ノ内町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査 報告 2010-3（財）京都市埋蔵文化財研究所 2010 年
32	2011	発掘 (5 次)	2010.11.22 ～ 2011.03.11	飛鳥の竪穴住居・土坑・溝、平安 中期の建物・井戸・土坑・溝、鎌倉 ～室町の土坑・溝・集右遺構など	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵 文化財研究所発掘調査報告 2010-15（財）京都市埋 蔵文化財研究所 2011 年
33	2011	発掘 (6 次)	2010.11.28 ～ 2012.01.26	古墳以降の溝・土坑・落込、平安 の溝、鎌倉～室町の柱穴・溝・土 坑・土坑墓・門跡など	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ田』古墳群』京都市埋蔵 文化財研究所発掘調査報告 2011-8（財）京都市埋蔵 文化財研究所 2012 年
34	2012	発掘 (7 次)	2012.08.13 ～ 2012.11.30	鎌倉～室町の溝・柵・門跡など	『常盤仲之町遺跡・一ノ井跡』京都市埋蔵文化財研 究所発掘調査報告 2012-11（財）京都市埋蔵文化財 研究所 2013 年
35	2014	発掘	2014.02.17 ～ 2014.04.11	飛鳥の竪穴建物・土坑・溝、奈良 の掘立柱建物・柵、平安の柵・柱 穴・土坑・溝など	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘 調査報告 2014-4（財）京都市埋蔵文化財研究所 2014 年
36	2021	発掘	2021.03.19 ～ 2021.04.21	鎌倉前半の柵列・井戸・土坑、南 北朝～室町中頃の建物・井戸・土 坑など	『一ノ井遺跡発掘調査報告書』文化財サービス発掘 調査報告書第 18 集（株）文化財サービス 2021 年
37	2023	発掘	2023.10.23 ～ 2023.12.04	平安の溝・土坑など	『常盤仲之町遺跡』一右京区法雲院地内における埋 蔵文化財発掘調査― 株式会社アルケス 2024 年
38	2024	発掘	～ 2025.02.14		現代報告書作成中 古代文化調査会

第Ⅲ章 遺構

1. 基本層序（図3）

現状の調査地の全体的な地形はほぼ平坦である。その敷地の中央南部に、約8度北が東に傾く南北12m、東西25mのトレンチが文化財保護課の指導により設定された。

基本層序は駐車場が作られるために盛られた現代盛土、旧耕土1（2層）、旧耕土2（3層）、地山（10YR5/3にぶい黄褐色シルト）となる。トレンチ北西部には断面図には表現できないが、旧耕土と地山の間に耕土である10YR5/3にぶい黄褐色シルトに暗褐色砂泥が混じる土層がある。旧耕土、床土は近年造成のため盛土をした段階で乱されたようで存在しないところも多い。地山面は地表下約0.6mであり、調査区南北12mに対し南に約0.2m標高が下がる地形となる。

2. 遺構

遺構は地山（10YR5/3にぶい黄褐色シルト）上面で検出した。遺構総数は109基である。平安時代後期から江戸時代後期までの遺構はあるが、まとまりのある時期としては平安時代後期から鎌倉時代の時期のもので大きく3時期（平尾編年の5・6・7段階）に分けることができる。その主な遺構は土坑墓と溝、建物である。その他は平安時代中期（3段階）と江戸時代後期の溝が数条あるにとどまった。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代後期	土坑14-2	
平安時代晩期 ～鎌倉時代前期	土坑1・4・5・14-1・73・79・80・85	
鎌倉時代中期～後期	建物1、土坑60・74	
江戸時代後期	溝1・2	

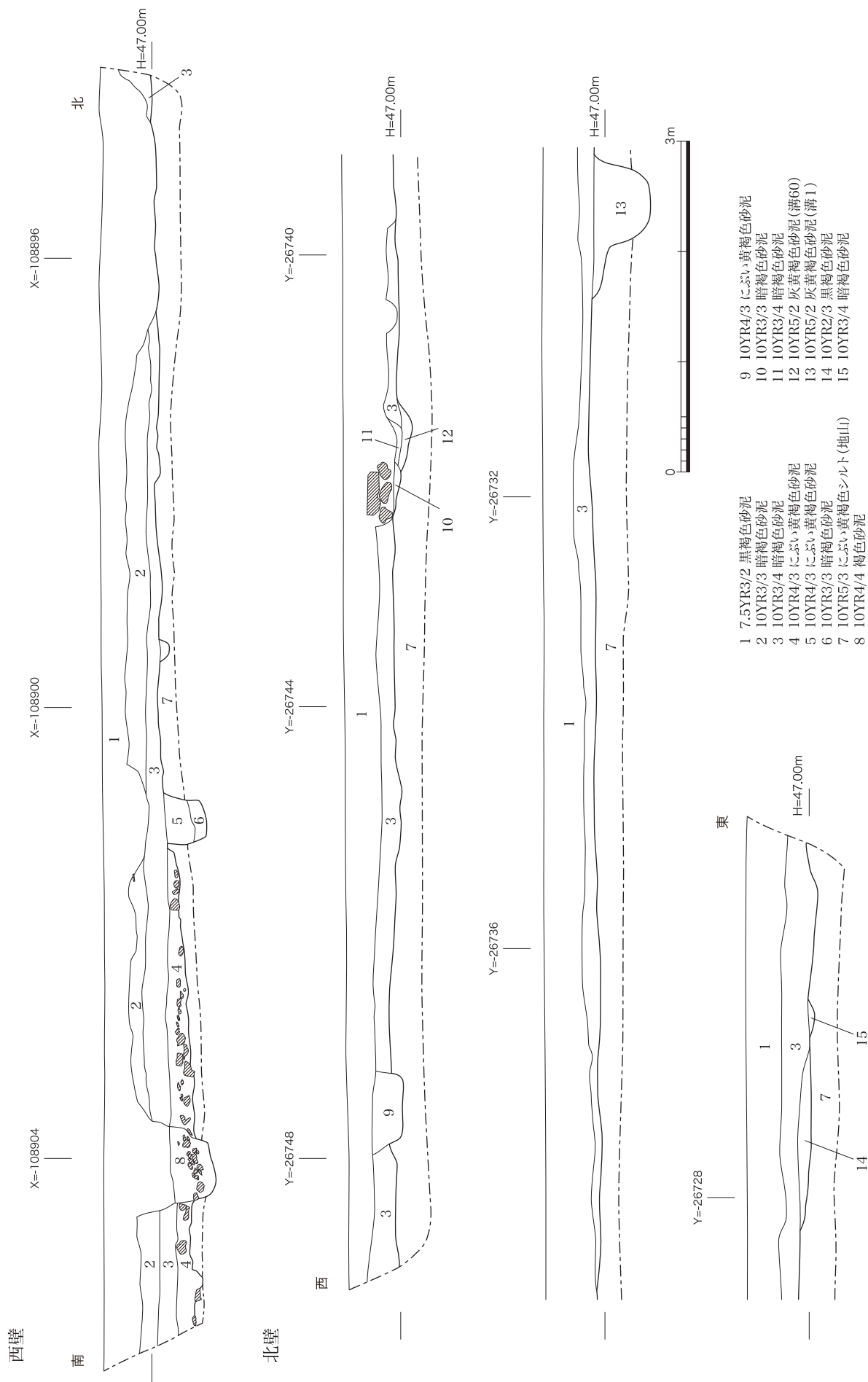


図4 西壁・北壁断面図(1:50)

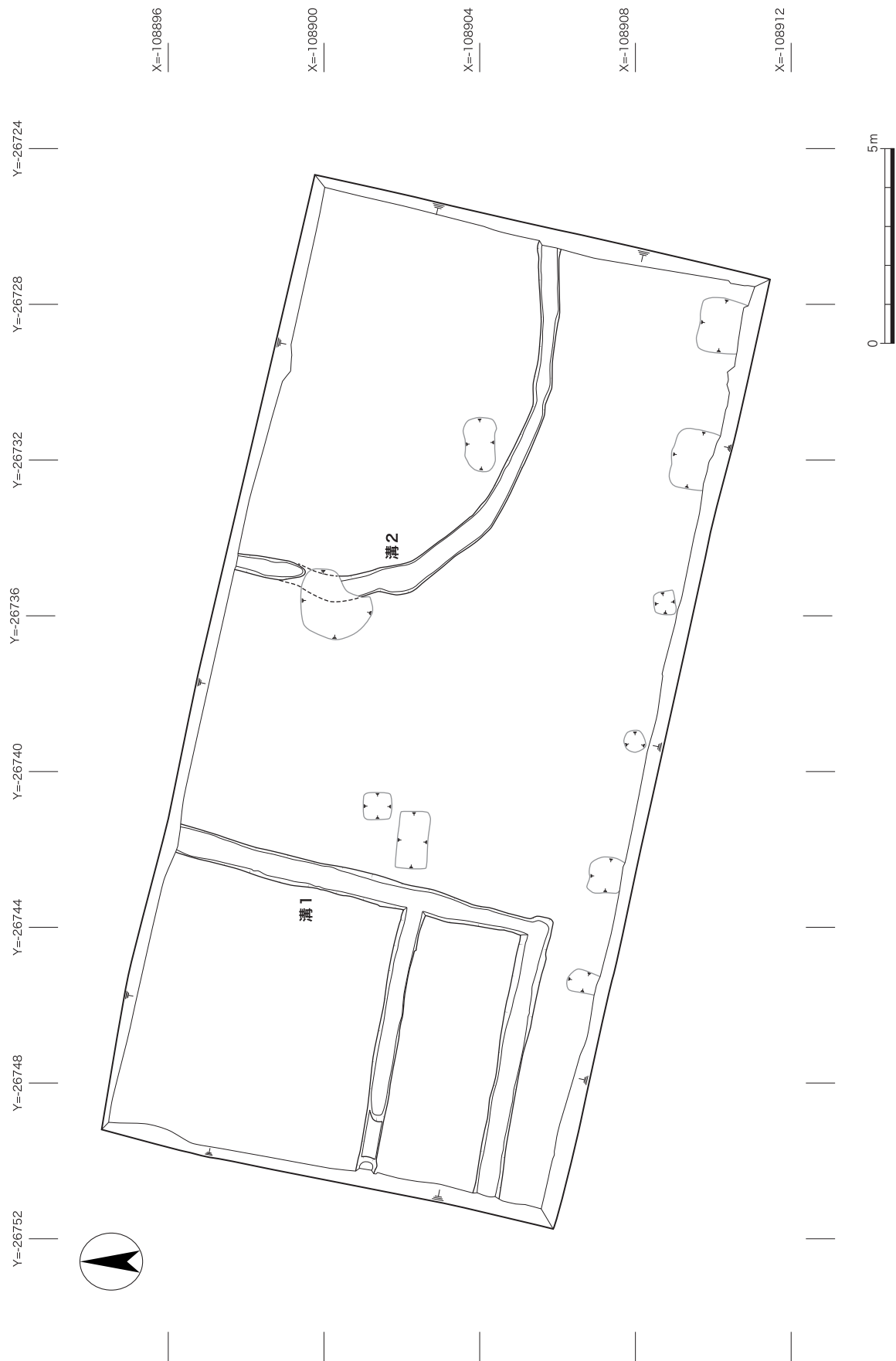


图5 第1面平面图(1:150)

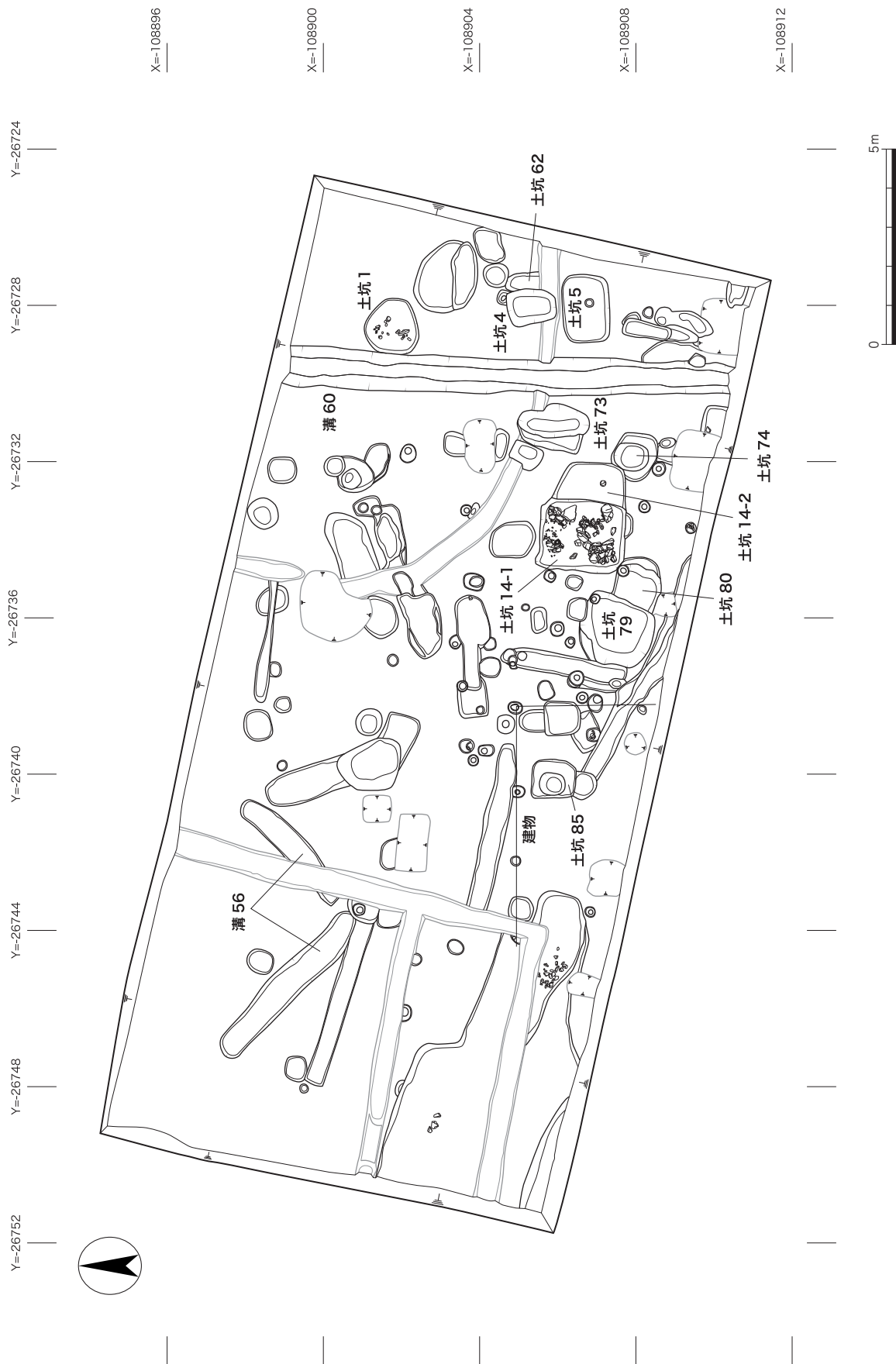


图6 第2面平面图(1:150)

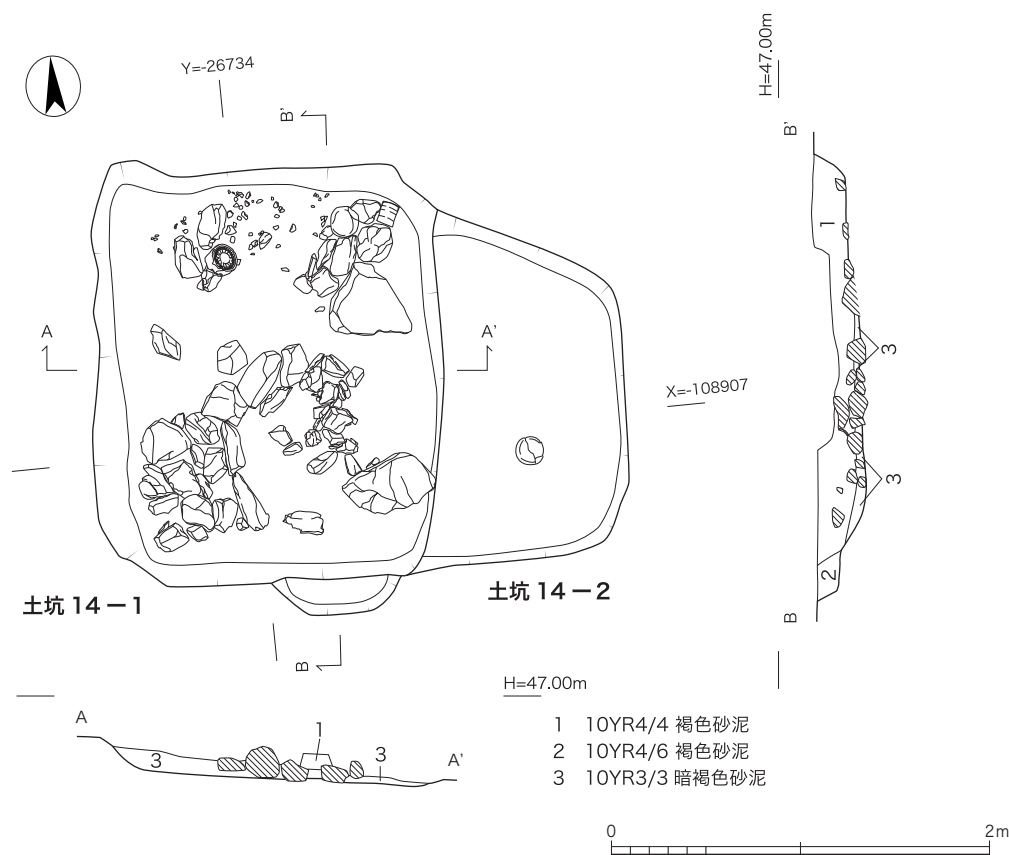


図7 土坑 14-1・14-2 実測図(1:40)

3. 平安時代後期（5段階）の遺構（図版3）

この時期の遺構には土坑があり、墓（土坑 14-2）がある。以下にそれらの概要を述べる。

土坑 14-2 調査区南東部で検出した。西部を土坑 14-1 に切られた形で検出した。検出時東西 1.1m、南北 1.7m、深さ 0.2m で形状は隅丸長方形と思われる。埋土は 10YR4/4 褐色砂泥を呈する。土坑中央やや東南部に完形の土師器を伏せた状態で検出した。当初土坑 14-1 と一つの遺構と認識して掘下げていったところ、新旧 2 時期の遺構であることが判明した。

4. 鎌倉時代初期（6段階）の遺構（巻頭図版2、図6～9、図版4～8）

この時期の遺構には土坑があり、主なものは墓である。以下それらの概要を述べる。

土坑 1 調査区北東隅で溝 60 に西端を切られる形で検出した。検出時で東西 1.37m、南北 1.39、深さ 0.1m で、形状はほぼ円形で埋土は 10YR2/3 黒褐色砂泥を呈する。土坑底部に完形の土師器や拳位の石が並ぶように検出された。

土坑 4 調査区東端中央で検出した。東西 0.9m、南北 1.3m、深さ 0.4m で形状は隅丸長方形で埋土は 10YR3/4 暗褐色砂泥を呈する。

土坑 5 調査区東端中央南、土坑 4 の南側で検出した。東西 1.7m、南北 1.2m、深さ 0.15m で形状は隅丸長方形で埋土は 10YR3/3 暗褐色砂泥を呈する。中央やや東寄りに径約 0.2m で円形の穴があり埋土は 10YR3/3 暗褐色砂泥と土坑全体が同じ土で埋められている。

土坑 14－1 調査区東南部で検出した。検出当初は一つの土坑として掘り進めたが、2つの土坑が切りあっていることが判明しそれぞれを土坑 14－1 と土坑 14－2 とした。土坑 14－1 は東西 1.82m、南北 2.2m、深さ 0.25m で形状は隅丸長方形、埋土は、上層は 10YR4/4 褐色砂泥、10YR3/3 暗褐色砂泥を呈する。土坑底部の西端に平らな面を上にして大きめの石が据えられている。北側の石は平坦面が東西 0.34m、南北 0.32m ある。南側の石の平坦面は東西 0.26m、南北 0.26m を測り、2 石の中心間距離は 0.93m で両石共に表面には火を受けた痕跡が残り赤褐色を呈する。両石を含め多くの石が敷き詰められたようになっており、その中で土坑北側のやや西寄りで梵字名の軒丸瓦が石に支えられるような形で検出した。埋土や土坑底部には焼けた痕跡は認められなかった。

土坑 62 調査区東端中央、土坑 4 の東側で検出した。東西 0.4m、南北 0.9m、深さ 0.15m で形状は隅丸長方形、埋土は上下 2 層に分かれ上層は 10YR3/3 暗褐色砂泥、下層は 10YR4/6 褐色砂泥を呈する。

土坑 73 調査区東やや南側で検出した。東西 1.2m、南北 1.8m、深さ 1.0m で形状は縦長の楕円形を呈し、土坑東側で一段下がる。埋土は 3 層に分かれ上層は 10YR3/4 暗褐色砂泥、中層は 10YR4/4 褐色砂泥（礫混）、下層は 10YR5/8 黄褐色砂泥を呈する。

土坑 74 調査区東南部、土坑 14－2 の東南側で検出した。東西 1.1 m、南北 1.05m、深さ 0.2 m で形状は方形、坑内北側に東西 0.7m、南北 0.9m、深さ 0.2m の楕円形を呈して一段下がる。埋土は上下 2 層に分かれ、上層は 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、下層は 10YR3/4 暗褐色砂泥を呈する。

土坑 79 調査区中央南端で土坑 80 と重なるように検出した。東西 1.7m、南北 1.7m、深さ 0.3m で形状は不定形、埋土は 10YR3/4 暗褐色砂泥を呈する。

土坑 80 調査区中央南端、土坑 79 の東側で検出した。検出時東西 1.4 m、南北 1.2m、深さ 0.3 m で形状は隅丸長方形、埋土は 10YR3/3 暗褐色砂泥を呈する。

土坑 85 調査区中央やや西南部で検出した。東西 0.9 m、南北 1.1m、深さ 0.15m で形状は隅丸長方形を呈し埋土は 10YR3/4 暗褐色砂泥である。坑内中央やや西側で隅丸方形を呈する東西 0.55m、

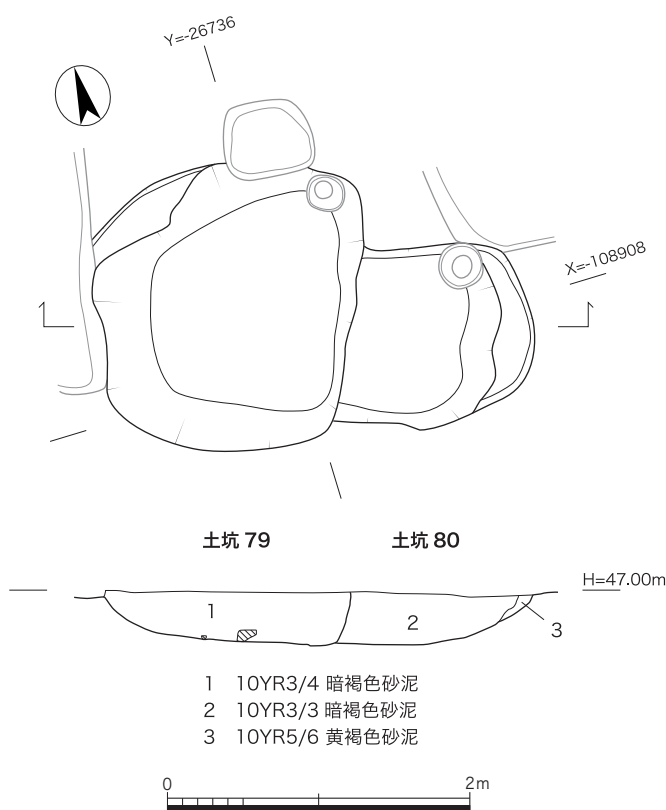
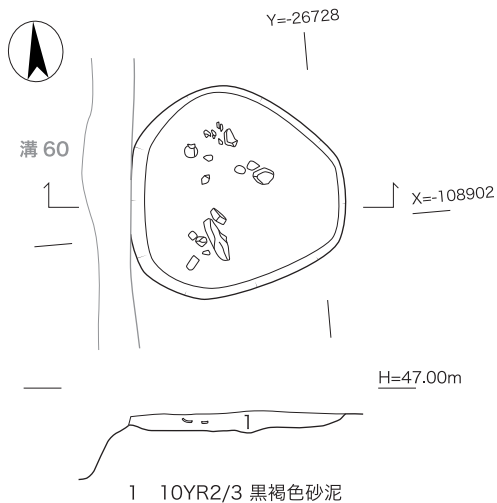
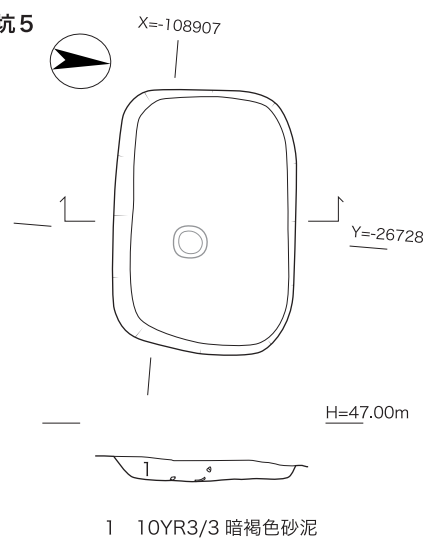


図8 土坑 79・80実測図(1:50)

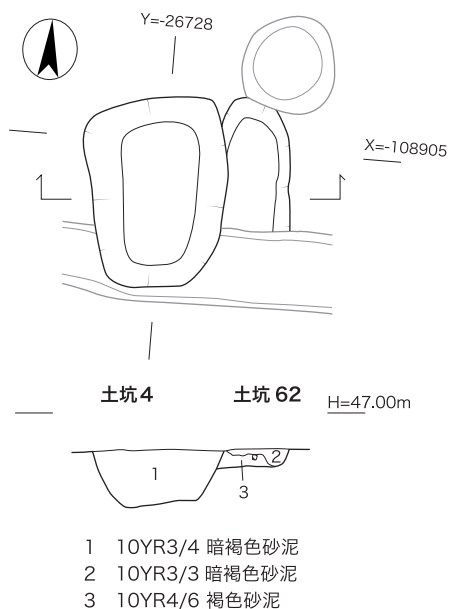
土坑 1



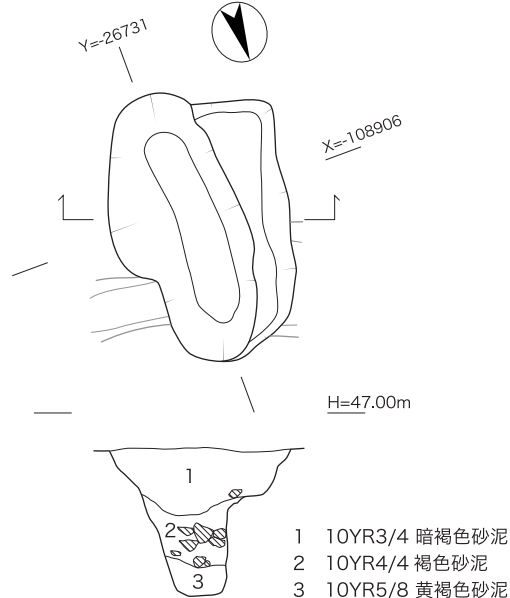
土坑 5



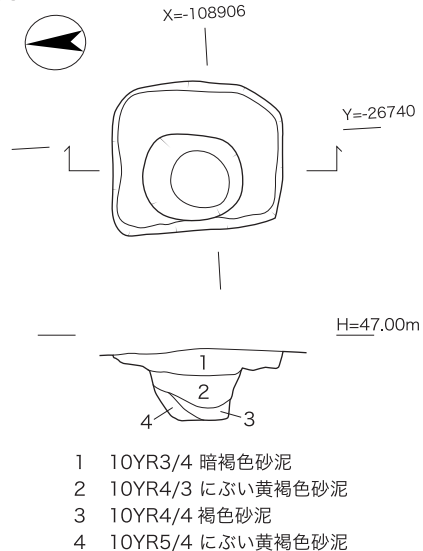
土坑 4・土坑 62



土坑 73



土坑 85



土坑 74

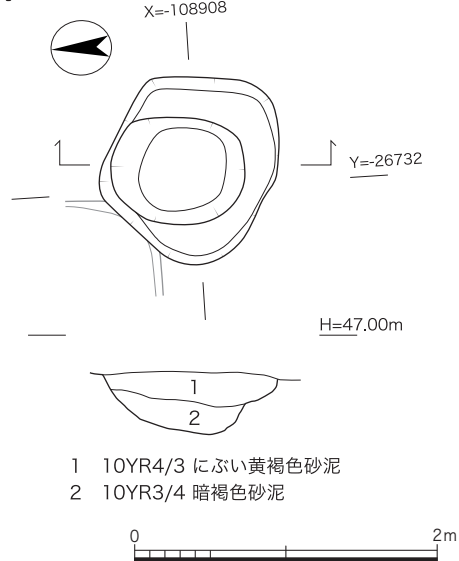


図9 土坑 1・4・62・5・73・74・85実測図(1:50)

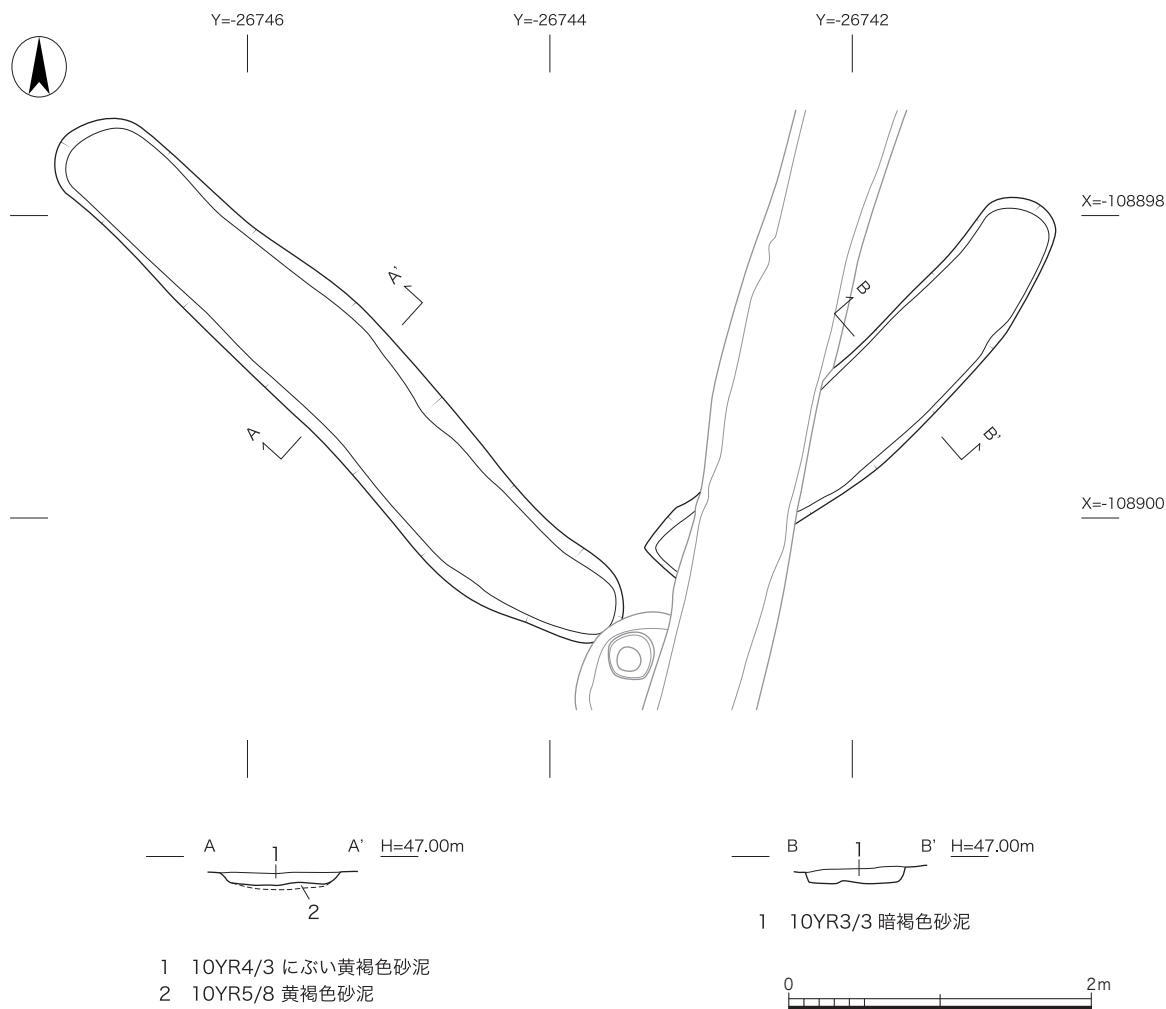


図 10 溝 56実測図(1 : 50)

南北 0.65m、深さ 0.3m のものがあり埋土は 3 層に分かれ上層は 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、中層は 10YR4/4 褐色砂泥、下層は 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥を呈する。

溝 56 調査区北西部で検出した。当初は溝 56・58・59 の 3 遺構としていた。一番西側にある溝 59 としていたものは座標北から約 134° の方向へ 4.8m 検出し、それに直行する形で溝 58・56 が約 44° の方向に 3.5m 検出した。各遺構の規模や連続性、埋土の類似性から、一つの溝（溝 56）とした。規模は溝幅 0.6 ～ 0.8m、深さ 0.1m である。東側の埋土は 10YR3/3 暗褐色砂泥、西側は 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥で、下部に 10YR5/8 黄褐色砂泥がある。

5. 鎌倉時代中期～後期（7 段階）の遺構（図 10・11、図版 8・9）

この時期の遺構には建物と溝がある。

建物は調査区張横やや西寄りの南部で検出した。柱穴 42・38・95・43・109 からなる。各柱穴の規模は約 0.3m 前後の円形である。東西棟で梁行 1 間、桁行 3 間分を検出した。梁間は 2.1m、

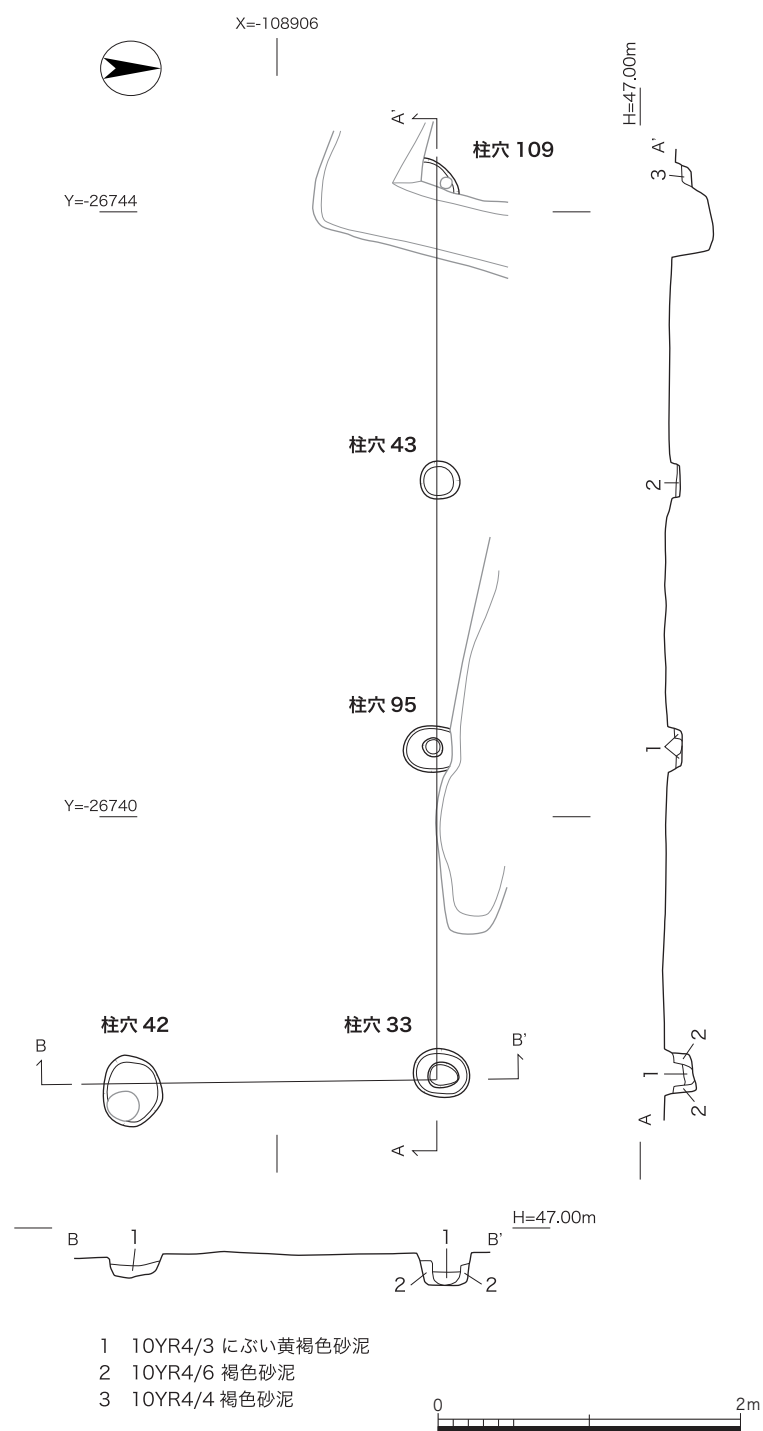


図 11 建物実測図(1 : 50)

桁行は東から 2.1m、1.8m、1.95m
を測る。建物の方位はほぼ座標に近い。

溝 60 調査区東端やや西側で検出
した。検出時、南北 11.6m、幅 1.0m、
深さ 0.4 ～ 0.5m で形状は U 字を呈
する。埋土は 10YR3/4 暗褐色砂泥で
ある。調査区を南北に貫く溝で調査区
北・南側に延びる。方位は座標北と考
えられる。

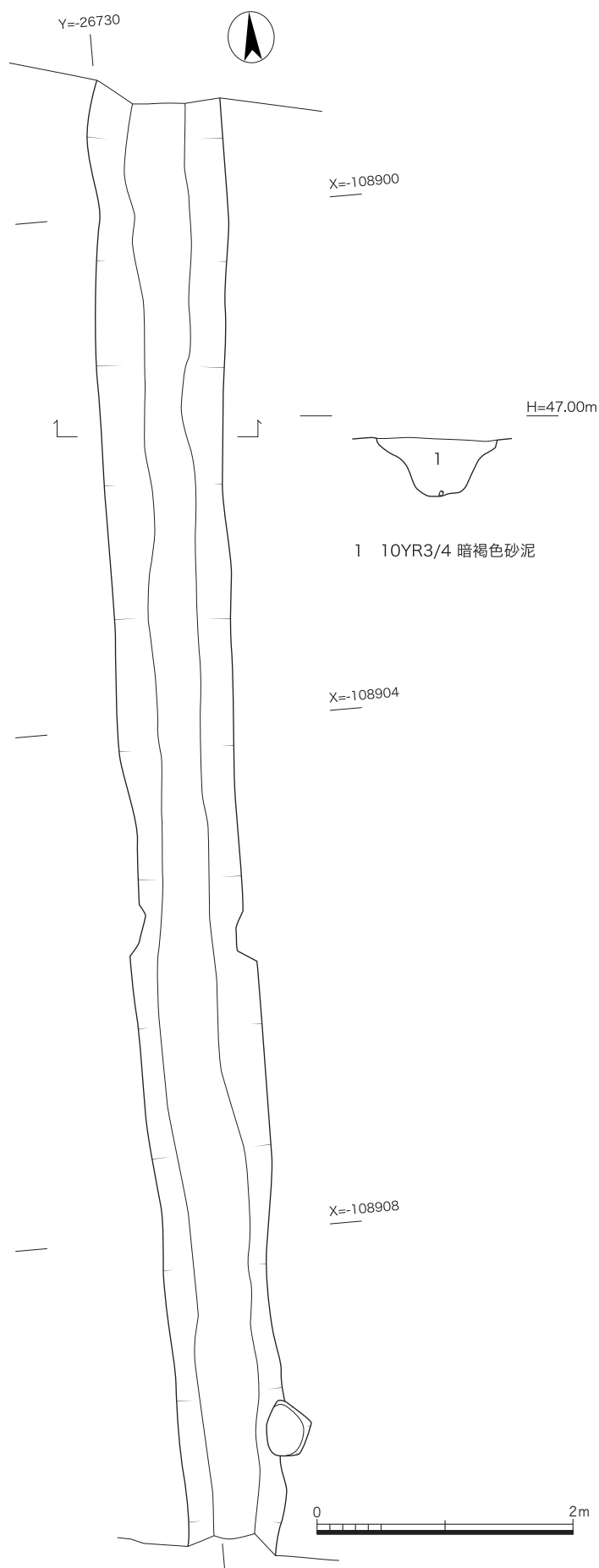


図 12 溝 60実測図(1 : 50)

第IV章 遺物

1. 遺物概要

遺物は、遺物コンテナで4箱出土した。その内容は土師器、瓦、瓦器、磁器、陶器などがある。時代別では平安時代中期から鎌倉時代と江戸時代の遺物が出土している。それらは遺構の数が圧倒的に多くなる鎌倉時代初期～前期のものが多数を占める。

2. 土器類・瓦類・銭貨・土製品・石製品（図12・13、図版10～12）

平安時代（3～5段階）

この時期に該当する遺物は土師器、須恵器、瓦が出土している。時代的には平安時代中期と後期のものがある。中期のものとして土坑44・83出土のものであるが遺物量が少なくどれも小片である。土坑83からは土師器皿Aと須恵器壺（1、2）、土坑44からは須恵器硯（3）の一部と思われるものが出土している。いずれも3段階に属するものである。平安時代後期のものとしては土坑14－2から土師器皿N（4）が土坑内で裏向けにしたような状態で出土した。口径14.0cm、器高2.7cmを測る。時期的には5段階に属するものである。

鎌倉時代前期（6段階）

この時期の遺物には土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、白磁、青磁、青白磁、陶器、滑石製品などが出土したが大半は土師器である。それらは主に土坑1・2・5・14－1・48・79・80・88から出土した。土師器には皿Nが多く、口径13cmを超える大型（5、8～11、18～21、28、37）と口径9cm前後の小型（12～15、27、35、36、39）の2種類がある。その他、皿S（6、17、22）、皿Ss（16）、皿X（26）がある。皿以外では羽釜（7）が一点出土している。皿Sは口径が計測可能なものは1点しかなく口径14.2cm、器高2.6cm（22）を測る。5・6に内面内部に赤褐色の付着物が認められた。皿Ssは口径10.2cm、器高1.5cmである。皿Xは口径9.2cm、器高1.3cmである。

須恵器（33）は鉢で口縁部の一部のみの破片である。口径32.6cm、残存高9.5cmである。東播系のものである。

滑石製石鍋（34）は口縁部の一部が残存したもので把手付石鍋であるが把手付部はほぼ潰されている。口径36.8cm、残存高9.5cmと大型のものである。

白磁は皿（30、38）と碗（24、31、42）がある。皿（30）は口径10.2cm、器高2.8cmである。皿（38）は口径8.3cm、器高1.4cmである。碗（24、42）は口縁部が玉縁状口縁である。他に青磁皿（25）、青白磁壺（23、32）がある。どれも小片である。

瓦器は碗（29、40）と羽釜（41）があるが、どれも小片である。

土製品は土錘（44）で径1.3cm、長さ3.3cmである。

軒丸瓦（62）は瓦当径が 15.0cmを測り、瓦当面中房に梵字を配する複弁蓮華文である。同様の軒丸瓦は大阪府の日置荘遺跡 G 地区から出土（註 1）している。

平瓦（63）は縦・横とも約 12cmが残るもので、外面は斜格子タタキの中に中心で整った交差をなさないで文様が雑な放射状をなすタタキを施し、内面には細かい布目を残す。

錢貨（64）は径 2.3cmで治平元宝と思われる。

鎌倉時代中期～後期（7 段階）

この時期の遺物には土師器、瓦器、陶器、滑石製品などがあるが、この時期の遺物量は少片が大半である。それらは主に溝 60、土坑 74 から出土している。土師器は皿 N（45）と皿 S（50）がある。口径が計測可能なものは皿 S のみで口径 6.8cm、器高 2.2cmである。その他の遺物も光景を計測可能なものはない。瓦器には鍋と羽釜（47、51）、須恵器鉢（46）、施釉陶器皿（48）、滑石製鍋（49）が出土した。いずれも時期的には 7 段階のものである。

江戸時代後期（13 段階）

この時期に遺物には土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付などがある。それらは溝 1 から出土した。土師器は皿 S（52、53）がある。（52）は口径 10.2cm、器高 1.9cm、（53）は口径 11.7cm、器高 2.2cmを測る。焼締陶器には壺（54）と搦鉢（55）がある。壺は上部のみ残存する信楽の製品で口径 13.8cm、器高は残存高 8.6cmである。搦鉢は口径 25.1cm、器高 9.7cmを測り備前系のものである。施釉陶器碗（56）は口径 13.2cm、器高 5.0cmを測り肥前の製品である。染付は皿（58）と碗（57、59～61）がある。皿は口径 10.0cm、器高 2.5cmを測る。碗は口径 10.6～14.0cm、器高 5.8～6.3cmを測る。いずれも伊万里の製品である。

表 3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	A ランク点数	B ランク 箱数	C ランク 箱数
平安時代中期	土師器・須恵器・瓦		土師器 1 点・須恵器 2 点		
平安時代後期	土師器・瓦		土師器 1 点		
平安時代晩期 ～鎌倉時代前期	土師器・瓦器・輸入陶 磁器・白磁・青磁・軒 瓦・土製品・石製品・ 錢貨		土師器 25 点・須恵器 1 点・ 瓦器 3 点・白磁 5 点・青磁 1 点・青白磁 2 点・輸入陶 磁器 1 点・滑石製品 1 点・ 土製品 1 点・軒丸瓦 1 点・ 軒平瓦 1 点・錢貨 1 点		
鎌倉時代中期 ～後期	土師器・須恵器・瓦 器・染付・施釉陶器・ 石製品・瓦		土師器 2 点・須恵器 1 点・ 瓦器 2 点・施釉陶器 1 点・ 滑石製品 1 点		
江戸時代後期	土師器・焼締陶器・染 付・施釉陶器		土師器 2 点・焼締陶器 2 点・施釉陶器 1 点・染付 5 点		
合 計		5 箱	64 点（1 箱）	0 箱	4 箱

※ A ランクを選出したため当初より箱数が増加している。

註1 「日置荘遺跡」―近畿自動車道松原すさみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書―
大阪区教育委員会・(財)大阪文化財センター 1995.3

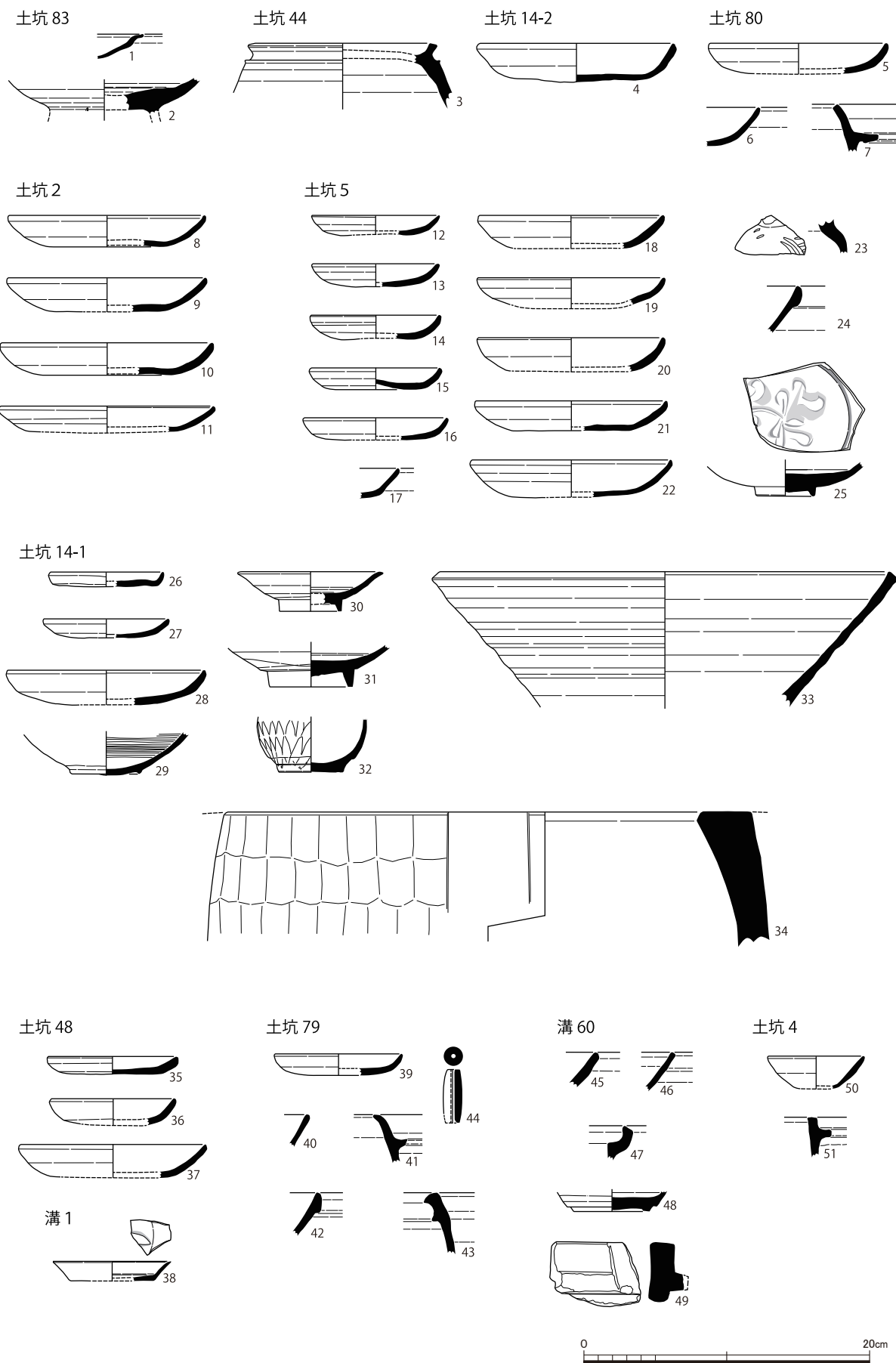


图 13 出土遺物実測図(1:4)

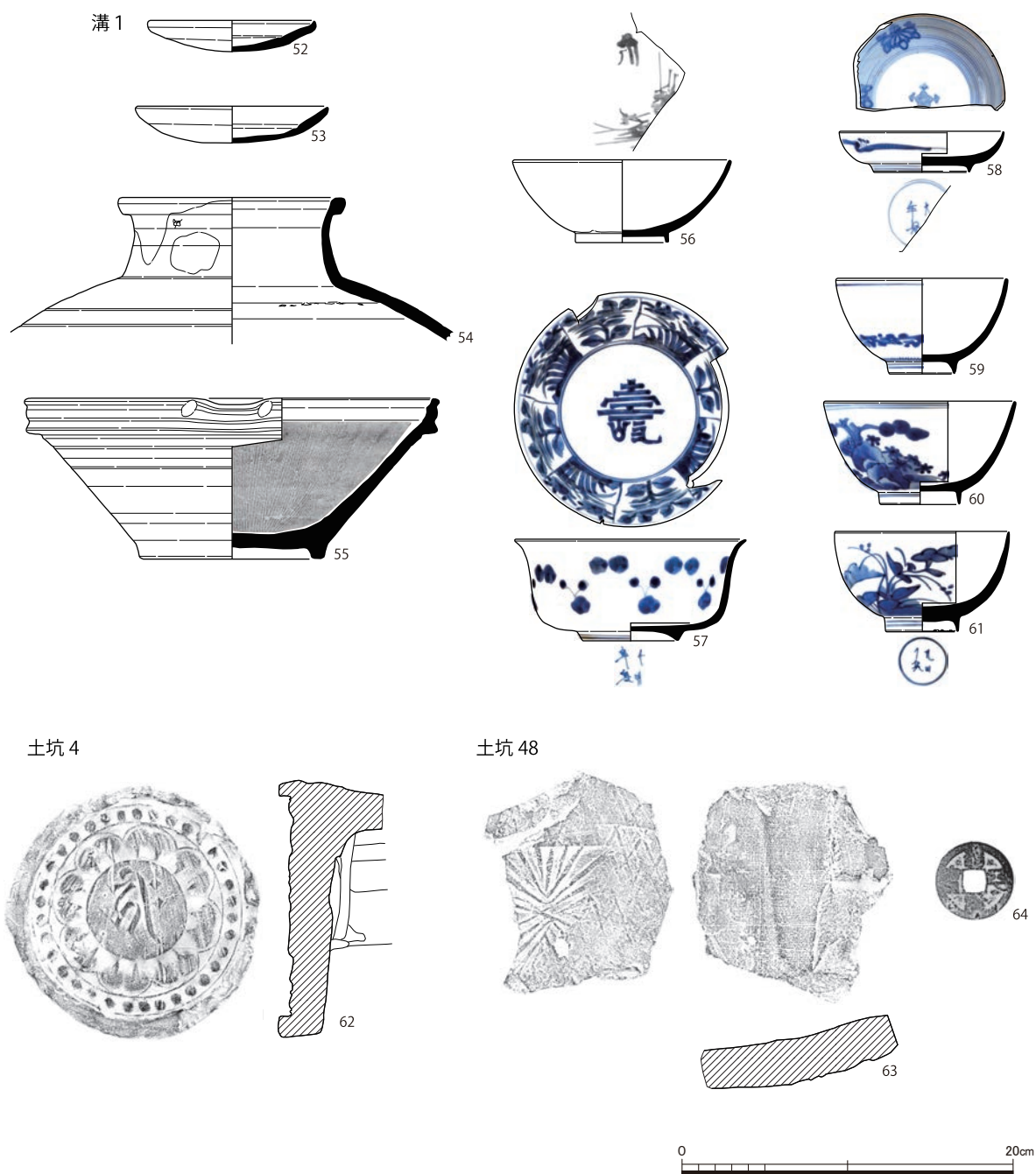


图 14 出土遺物実測図(1:4)

表4 遺物計測表1

No.	種類	器形	口径	器高	色調	出土遺構	備考
1	土師器	皿 A		1.8 残	胎土 7.5YR7/3	土坑 83	
2	須恵器	壺		2.4 残	7.5YR5/1	土坑 83	台付壺
3	須恵器	硯	13.2	4.6 残	10YR6/1	土坑 44	
4	土師器	皿 N	14.0	2.7	7.5YR7/3	土坑 14-2	
5	土師器	皿 N	12.6	2.1	7.5YR7/4	土坑 80	
6	土師器	皿 (S)		2.7 残	7.5YR7/3	土坑 80	
7	土師器	羽釜		3.4 残	10YR8/3	土坑 80	
8	土師器	皿 N	13.9	2.2	10YR8/2	土坑 2	
9	土師器	皿 N	14.0	2.4	7.5YR7/3	土坑 2	
10	土師器	皿 N	15.0	2.2	10YR8/3	土坑 2	
11	土師器	皿 N	15.2	1.9	10YR6/4	土坑 2	
12	土師器	皿 N	9.0	1.4	5YR8/4	土坑 5	
13	土師器	皿 N	9.0	1.6	7.5YR8/3	土坑 5	
14	土師器	皿 N	9.2	1.7	5YR7/3	土坑 5	
15	土師器	皿 N	9.3	1.5	7.5YR8/4	土坑 5	
16	土師器	皿 Ss	10.2	1.5	7.5YR8/2	土坑 5	
17	土師器	皿 S		2.2	7.5YR8/2	土坑 5	
18	土師器	皿 N	13.1	2.3	5YR7/6	土坑 5	
19	土師器	皿 N	13.2	1.9 残	5YR2/6	土坑 5	
20	土師器	皿 N	13.2	2.4	5YR7/6	土坑 5	
21	土師器	皿 N	13.5	2.1	5YR8/3	土坑 5	
22	土師器	皿 S	14.2	2.6	7.5YR8/1	土坑 5	
23	青白磁	壺		2.9 残	釉 5Y8/2 胎土 2.5Y8/2	土坑 5	
24	白磁	碗		3.3 残	釉 7.5Y7/1 胎土 2.5Y7/1	土坑 5	
25	青磁	皿		2.4 残	釉 5Y6/3 胎土 10YR7/1	土坑 5	
26	土師器	皿 X	8.1	1.0	7.5YR8/2	土坑 14-1	
27	土師器	皿 N	8.8	1.3	5YR6/6	土坑 14-1	
28	土師器	皿 N	14.0	2.4	7.5YR7/2	土坑 14-1	
29	瓦器	碗		2.9	胎土 7.5YR7/2	土坑 14-1	
30	白磁	皿	10.2	2.8	釉 2.5Y7/1 胎土 2.5Y8/1	土坑 14-1	
31	白磁	碗		2.9 残	釉 2.5Y7/1 胎土 10YR8/1	土坑 14-1	
32	青白磁	壺		3.8 残	釉 7.5GY7/1 胎土 2.5Y8/1	土坑 14-1	
33	須恵器	鉢	32.6	9.5 残	7.5YR8/1	土坑 14-1	
34	滑石製品	鍋	36.8	9.5 残	2.5Y7/1	土坑 14-1	
35	土師器	皿 N	9.2	1.3	7.5YR7/4	土坑 1	

表4 遺物計測表2

No.	種類	器形	口径	器高	色調	出土遺構	備考
36	土師器	皿 (Nd)	8.9	1.9	7.5YR8/3	土坑 1	
37	土師器	皿 N	13.2	2.4	7.5YR7/4	土坑 1	
38	白磁	皿	8.3	1.4	釉 2.5Y8/1 胎土 5Y8/1	土坑 48	
39	土師器	皿 N	9	1.5	5YR7/4	土坑 79	
40	瓦器	椀		2.3 残	胎土 7.5YR7/2	土坑 79	
41	瓦器	羽釜		3.4 残	胎土 7.5YR7/1	土坑 79	
42	白磁	椀		3.0 残	釉 2.5Y7/2 胎土 7.5YR8/1	土坑 79	
43	輸入陶器	鉢		4.3 残	7.5YR6/3	土坑 79	無釉
44	土製品	土錘	1.3	長 3.3	胎土 7.5YR6/4	土坑 79	
45	土師器	皿 (N)		2.4 残	7.5YR7/2	溝 60	
46	須恵器	鉢		2.7 残	10YR6/1	溝 60	
47	瓦器	鍋		2.3 残	胎土 10YR7/1	溝 60	
48	施釉陶器	皿		1.4 残	釉 7.5Y6/2 胎土 2.5Y8/1	溝 60	
49	滑石製品	鍋	残長 5.2		10YR7/1	溝 60	
50	土師器	皿 S	6.8	2.2	10YR8/1	土坑 74	
51	瓦器	羽釜		3.0 残	胎土 10YR8/1	土坑 74	
52	土師器	皿 S	10.2	1.9	7.5YR7/4	土坑 1	
53	土師器	皿 S	11.7	2.2	7.5YR6/3	土坑 1	
54	焼締陶器	壺	13.8	8.6 残	外面 5YR5/4 胎土 10YR8/2	土坑 1	信楽
55	焼締陶器	擂鉢	25.1	9.7	外面 2.5YR3/4 胎土 7.5YR7/1	土坑 1	備前 (系)
56	施釉陶器	椀	13.2	5	釉 10YR8/2 胎土 10YR8/1	土坑 1	肥前
57	染付	椀	14	6.2		土坑 1	
58	染付	皿	10	2.5		土坑 1	
59	染付	椀	10.4	5.8		土坑 1	
60	染付	椀	11.6	6.3		土坑 1	
61	染付	椀	10.6	6.1		土坑 1	
62	瓦	軒丸瓦	瓦当径 15.3		10YR8/2	土坑 14-1	
63	瓦	平瓦	残長 13.6		5YR6/6	土坑 48	
64	銅銭	治平元宝	径 2.3			土坑 48	

第V章 まとめ

以上、今回の発掘調査における調査成果を示した。調査では主に平安時代後期から鎌倉時代にかけて3時期の遺構群があることがわかった。変遷としては各遺構の出土遺物、方位などから1時期目は遺物年代の5段階、2時期目は6期段階、3時期目は7段階となる。3時期目の溝や建物の方角はほぼ座標北の方角を示すものである。

1 期目の遺構は土坑 14 - 2 のみで、遺構の西部を土坑 14 - 1 に切られている。遺構の東南部には完形の土師器をうつ伏せにして据えた状況があり土坑墓と考えられ、時期的に 12 世紀初～中頃までのものと考えられる。今調査地東側の調査 5 では、多数の土坑墓が検出されており、平安時代に属する土坑墓もあるが、数量的には大半が鎌倉時代以降となり、確実に平安時代に属するものは少ない。この時期に土坑墓を作り始めたと思われる。

2 期目の遺構群は鎌倉時代初期に属するものであり、今調査で最も多くの遺構を検出した。その大半は形状や規模などから土坑墓と考えられる。形状は隅丸方形のものが多かったが、円形に近いものや不定形で深いものなど様々であった。この中で土坑 14 - 1 は規模も大きく、大きな石の平坦面を上にして配置してその周りにも拳程度の石が敷き詰めるようにある。大きな石の平らな表面が火を受けている。また、軒丸瓦を石で支えたような形で瓦当面を強調するような形で検出している。土坑内から骨は出土しておらず、土坑底部に火を受けた痕跡は認められないが、火葬場の可能性も捨てきれない。

3 期目は鎌倉時代中期～後期に属するもので、区画を示すものと思われる溝と建物を検出した。この時期の遺構は方位が真北に近いものである。先述の調査 5 では鎌倉時代後期の土坑墓が 2 グループに分かれて計 60 基が出土している。今調査では、土坑墓の大半が鎌倉時代前期で鎌倉時代中・後期には土坑墓がなくなる。今調査以西の調査例が乏しいことから、断言はできないが墓域が東のほうに集中していった可能性がある。

火葬を伴う葬送活動や太子信仰・仏舎利信仰・弥勒信仰等によって、それらを庶民にまで拡大した西大寺律宗真言僧叡尊の弟子・澄禅が建長 3 年（1251）広隆寺奥院桂宮院を造営し、広隆寺を復興させ戒律を広めていく時期と 3 期目は重なっており、広隆寺周辺の民衆にまでその影響が及んだ結果とも考えられる。

この時期以降、遺構・遺物とも一気に減少する。これと関連する可能性として調査区北西部で認められた土層がある。地山層に暗褐色砂泥層が混じるように堆積するもので畑跡と思われる。

この層を畑跡と考えた根拠は遺物が出土しないこと、土坑墓などの遺構の深度が浅いことがあげられる。地山面に成立した土坑墓をはじめとした遺構は室町時代以降の耕地化で地山面が削られ、遺構の表面が削られていった結果、浅いものとなったと考える。この層上面（図 9 - 2）には黒色を呈するブロック状の塊が確認でき、それらは鋤や鍬で耕した痕跡ではないかと考える。

室町時代以降はこの地周辺全体で耕地化していったと思われ、その後、江戸時代の寛文元(1661)年に烏丸資慶が祖父光廣の法号をとり、永源寺の仏頂国師を講じて法雲院を開創し現在に至る。江戸時代後期(18世紀後半)には溝が調査区の西部と北東部に成立する。西部の溝は逆F字状に出土し溝は断面形が四角を呈するものであり、建物の基礎とも考えられるが、溝底に柱穴や根石は認められなかった

以上、この地の利用変遷が見えてきたが広隆寺一帯に広がる平安時代後期から鎌倉時代にかけて営まれた墓域群が時代と共にどのような影響を受けながら展開するのかが今後の調査によって明らかになってくると思われる。現状及び今後の調査成果とその研究が進むことを願っている。

図 版



1. 全景垂直2 (上が東)



1. 江戸時代遺構全景（東から）



2. 全景（東から）



1. 土坑14-2 (東から)



2. 土坑14-2 (南から)



1. 土坑14-1（東から）



2. 土坑14-1（北から）



1. 土坑1 (東から)



2. 土坑4 (北から)



1. 土坑5 (東から)



2. 土坑73 (北から)



3. 土坑74 (北から)



1. 土坑73（北から）



2. 土坑79・80（東から）



1. 土坑85（北から）



2. 建物（北から）



1. 溝60、土坑1（南から）



2. 畑跡（東から）



3



4



8



9



16



14



20



18



23



22



35



25



63



38



44



64



32



31



62



26



27



28



29



33



34



48



49



53



56



54



55



58



59



57



60



61

報告書抄録

ふりがな	そうじいんあと(ほううんいんけいだい)・ときわなかのまちいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書 籍	総持院跡(法雲院境内)・常盤仲之町遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	特定非営利活動法人平安京調査会発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 6 集							
編著者名	辻 純一							
編集機関	特定非営利活動法人平安京調査会							
所在地	〒603-8042 京都市北区上賀茂狭間町9番地3号							
発行所	特定非営利活動法人平安京調査会							
発行年月日	2025 年 6 月 30 日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
そうじいんあと 総持院跡 ほううんいんけいだい (法雲院境内) ときわなかのまちいせき 常盤仲之町遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 うずまさほちがおかちょう 太秦蜂岡町 13 番地、他	26100	908	35 度 01 分 05 秒	135 度 42 分 25 秒	2025年 2月17日 ～ 2025年 3月26日	300 m ²	老人介護施設 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
総持院跡 (法雲院境内) 常盤仲之町遺跡	寺院跡 集落跡	平安時代後期		土坑(墓?)		土師器・瓦器・ 白磁・滑石製鍋		平安時代後期より鎌倉時代 全般にかけて3時期の遺構 群を確認した。平安時代後 期から鎌倉時代前期の2時 期はともに墓を中心とした 遺構を検出し、墓域だった 可能性が高い。 3期については、方位が真 北方向となり、建物や溝を 検出した。 総持院跡(法雲院境内)の 時期には溝を検出した。
		平安時代末期～ 鎌倉時代前期		溝・土坑(墓)		土師器・瓦・陶器		
		鎌倉時代中期～ 鎌倉時代後期		溝・建物		土師器・瓦・陶器		

総持院(法雲院境内)・常盤仲之町 遺跡発掘調査報告書

編集・発行 特定非営利活動法人平安京調査会
〒 603-8042 京都市北区上賀茂狭間町9番地3号
TEL 075-334-5680
<https://heiankyo-tyousakai.com>
コンピュータ・システム株式会社
〒 602-8453 京都市上京区笹屋町4丁目 273 番3
TEL 075-462-5411
<https://www.comsys-kk.co.jp>
発行日 2025 年 6 月 30 日